

| | |
|-------------|-----------------------------|
| 氏 名 | 田村歩 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（文学） |
| 学 位 記 番 号 | 博 甲 第 8896 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 31年 3月 25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審 査 研 究 科 | 人文社会科学研究科 |
| 学 位 論 文 題 目 | デカルト哲学における「経験」の機能に関する哲学史的研究 |

| | | | |
|-----|-----------|-------------------------|-------|
| 主 査 | 筑波大学 准教授 | Doctorat en philosophie | 津崎良典 |
| 副 査 | 筑波大学 教 授 | 博士（文学） | 桑原直巳 |
| 副 査 | 筑波大学 教 授 | 文学博士 | 保呂篤彦 |
| 副 査 | 筑波大学 名誉教授 | Doctorat en philosophie | 谷川多佳子 |

論 文 の 要 旨

本論文は、1) デカルトの哲学的著作において「経験 (*experientia* ; *expérience*)」という用語がどのような意味論的規定を与えられているかを解明し、2) デカルトの形而上学的考察の生成と展開において、〈主体が何かを経験する〉という事態が果たしている役割をテキスト外在的かつ内在的に考察するものである。したがって本論文は、以上の二つの問いにそれぞれ応えるべく、全二部構成となっている。

第一部「デカルトの形而上学体系にける「経験」の機能」は、全三章構成である。第一章「基礎的作業」においては、「経験」を感覚および記憶から生成するものと捉えるアリストテレスの見解を中世において引き継ぐアルベルトゥス・マグヌス、トマス・アクィナス、ドゥンス・スコトゥスらの所説を、先行研究を批判的に検証しながら概観し、そのうえで、彼らとの差異のもとで「経験」に関するデカルト的な規定が与えられうることを文献学的に考証する。第二章「「直観」・「知解」・「経験」」では前章の作業結果をうけて、デカルトの形而上学的考察における「経験」の具体的機能を、明晰かつ判明な事物を対象とする「直観」と／あるいは、その事物の本性を把握する「知解」と同一視する先行研究を批判し、いずれにも還元されえないそれ固有の特徴が剔抉される。すなわち、デカルトの著作を初期の『精神指導の規則』とそれ以降に区別したうえで、形而上学成立期のデカルトにおいては「経験」が「対象の現実的な遂行」として捉えられていたことが主張される。第三章「近世的「意識」概念の萌芽としての「経験」」においては、やはり前章での考察を発展させつつ、デカルトにおける「経験」の特徴を哲学史的な観点から際立たせるべく、近接概念である「意識」との関係が考察される。狭義における「意識」概念の成立は、17世紀後半から18世紀前半にかけてであり、したがってデカルトにおいてこの概念の存在を指摘することは困難だが、文献学的分析の結果、デカルトにはマルブランシュら次世代の考察を先取りする萌芽的発想の認められることが主張され、そのことをもって、明晰判明な事物を対象とする「知解」とは異なり、判明ではないが明晰な事物をも対象としうる「経験」の特徴が、やはり

そのようなあり方をしている「意識」との同型性のもとにおいて捉えられる。

以上、全三章の考察をもって、デカルトにおける「経験」という概念の積極的かつ総合的な規定がなされたと本論文は主張する。

第二部「デカルト自我論における個々の事例と「経験」」は、第一部での分析結果を、デカルト形而上学のうちとりわけ自我論を構成する諸論点に応用することを目指す。第一部と同様、三章構成である。

第四章「私は思惟する」という経験においては、コギトと通称される「経験」がなぜ不可疑とされるのかが解明される。その際に分析対象となるのは、「極めて有能で狡猾な欺瞞者」を想定する『省察』第二(AT VII 25)の議論である。従来のデカルト研究の定説であったアンリ・グイエやアンソニー・ケニーの主張(「欺瞞」という行為における作用と対象の関係から我の存在を導出する)を全面的に覆し、自らが欺かれるためには「思惟する」という「経験」が前提とされること、しかも、思惟の「様態」であれば何でもよいわけではなく、定言的判断を下し、かつ、その意味内容を理解することでなければならないこと(したがって、当該箇所では思惟の「様態」分析が先取されている)が、それぞれ主張される。つまり通称「コギト命題」とは、我は「欺かれる」から存在するのではなく、そもそも「思惟している」からこそ「欺かれる」のであり、したがって「思惟している」かぎり、つまり「欺かれている」かぎり、存在する、と解釈される。

第五章「私は存在する」という経験もまた、『省察』第二(AT VII 25)つまり通称「コギト命題」を分析対象とする。デカルトは当該箇所において「私は在る、私は存在する」という文言を「*pronuntiatum*」と呼称しているが、従来のデカルト研究はこれを「命題(proposition)」であると理解してきた。本章は、この見解を全面的に覆すことを目指す。そのために、「*pronuntiatum*」という用語の語源であるストア学派論理学の「*axioma*」概念に着目する。キケロによって「*pronuntiatum*」と訳されたこのストア的「*axioma*」は、主語と述語との概念的結合を抽象的に問うペリパトス学派論理学の「命題」とは異なり、現実的かつ個別的な事態を描写するためのものとみなされていたが、それが有する概念的特徴は、デカルトのコギトのうちにも明白に認められることが主張される。つまり、「私は在る、私は存在する」という文言は、現実的に「私によって言表される」という「経験」が成立するその現在時点においてのみ真となるのであり、没時間的である一般的な「命題」ではないのである。

第六章「意志的であることと自由であることは同一である」という経験では、本章のタイトルに引用されている文言の出てくる『省察』「第三答弁」を起点に、デカルトが、「自分の欲求は意識しているが、自分をそれへと決定している諸原因については無知であるという点に」自由意志という幻想の存することを主張するスピノザの向こうを張り、人間の自由意志を「経験によって」確証し、かつ、全能なる神による不変の摂理との両立を主張しえたことが論証される。すなわち、人間の領域(自由意志)を、神の領域(摂理)との対比ないし競合によるいわば相対的な仕方で規定するのではなく、前者を「経験」が確証しうる領域として、後者を「理性」が知解しうる領域として、それぞれ独立に展開・構築するというのである。

以上、全六章の考察をもって本論文は、デカルトの『哲学原理』にもあるように、「ただ、理性および経験によって確実であると知られるもののみを記す」ことを是とした彼の哲学とりわけ形而上学の体系の生成と展開において、〈主体が何かを経験する〉ということが決定的な役割を果たしていることを解明したと主張する。

審 査 の 要 旨

1 批評

独創的な研究のための着眼点は、つねに、一次文献の、知的忍耐力を要求される精査と、多言語を駆使した二次文献の消化によって与えられることを念頭に置いたうえで、本論文の西洋近世哲学史研究の特色を探し求

めるなら、それは、1) 従来のデカルト研究では看過されてきた、しかし哲学研究においては古代より重点的な考察対象となってきた「経験」という概念に着目したこと、2) 一見すると見落とされがちなデカルトの字句使用に着目したうえで、その特異性を同時代ないし過去の哲学者の使用法と比較したうえで剔抉し、かつそれを哲学史ならびに研究史の大局的な流れに位置付けて評価するという研究手法を採用したこと、以上の二点に存するといえよう。

まず後者の点について敷衍するなら、その文献学を重視する影響作用史研究の手法は、少なくともデカルト研究史の文脈で言えば、とりわけイタリア人研究者が得意とするところであり、分析哲学の観点を強力に導入している英米系の研究者と、独自の哲学史的解釈学を遂行しているフランス人研究者のあいだをいく、第三の、そういつてよければ新機軸を生み出す可能性のある手法であり、日本のデカルト研究史に照らしても独創的と判断しうる。とりわけ、日本哲学会と日仏哲学会の学会誌に掲載された査読付き論文をもとにした、本論文の第四章と第五章は審査員一致で高評価の対象となった。ただし、第一章における「経験」概念のアリストテレス＝トマス主義的伝統に関する鳥瞰は、使用されている一次資料の量が圧倒的に少なく、またこれに相関することとして、分析の質も説得的なものとはいいがたく、今後のいっそうの研究が期待された。

ついで前者の点について敷衍するなら、デカルト自我論における「経験」という概念に着目することは、やはりデカルト自我論における主要な主題である「修練」という近接概念に関する考察へと発展しうる可能性を秘めているものとして、やはり審査員のうちに強い知的関心を惹起した。あらゆる超越的な審級を括弧に入れた、主体の自己に対する徹底的に自己媒介的・自己目的的・自己規範化的な働きかけとしての反省という「経験」を核とする「修練」は、「アスケーシス (*askesis*)」という古代ギリシア哲学に由来し、イエズス会の創始者であるイグナティウス・デ・ロヨラの、トリエント公会議以降のキリスト教的な霊操を一つの大きな源泉として、とりわけ17世紀前半のフランスにおいて「黙想」ないし「瞑想」という形式で信仰生活の一環を構成していた。その一方で、デカルトを初めとする西洋近世哲学者たちは、霊操を言わば換骨奪胎し、もはや宗教的ないし道徳／倫理的な次元に位置付けられない内省として改変していったわけだが、本論文の研究成果は、このような改変のプロセスと、近世的な、さらには近代的な「意識」概念の成立(つまり「良心(*conscience*)」から「意識(*consciousness*)」へ；本論文においてすでに着手済みの研究課題)がどのような関係にあるのかという問いの考察へと発展しうるものである。これは、脱宗教化された近代的な個人主義の成立のメカニズムの一端を解明するものとなるはずで、畢竟、私たちの時代がどのようなものであり、私たち近代人はどのような心性のもと生きているのか、という大局的な問題に新しい光を与えるはずのものと評価できる。

しかし、まさしくこのような批評から推断されるように、デカルト哲学における「経験」の分類学を目指す本論文においては、それ以外の複数個の近接概念との差異に関する検討が不十分であるという指摘も審査員から出された。とりわけ、デカルトにおける判断論を構成する諸論点との関係性に関する考察は弱く、そのことが、とりわけ第六章の考察を浅薄なものにしているとの指摘が審査員から出された。

2 最終試験

平成31年2月18日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。